

九大施管保第3号  
令和3年5月27日

環境保全管理委員会  
委員長 村上 洋子 殿

施設管理課長  
今村 利光 公印省略

環境報告書2021の提出について（提出）

令和3年3月8日付け九大環環第135号にて依頼のありました標記について、別紙のとおり、提出いたします。

担当係 施設部施設管理課センターゾーン保全係  
長谷川 (90-2421)  
E-mail : hbekoei@jimu.kyushu-u.ac.jp

# 環境報告書

## 2021



基幹教育院  
共創学部  
カーボンニュートラル・エネルギー国際研究所

## 目次

---

トップメッセージ	.....	1
第1章 環境配慮活動に向けて		
○ 概要	.....	2
○ 環境マネジメント体制	.....	3
○ 環境活動計画と目標	.....	4
第2章 環境教育・研究と環境保全		
○ 新入生に対する環境・保全教育	.....	5
○ 環境関連の授業科目	.....	6
○ 安全管理	.....	7
第3章 エネルギー・資源の削減		
○ 資源、エネルギー、廃棄物	.....	8
○ エネルギー関係のデータ	.....	9
○ 用紙類の使用量削減、グリーン購入	.....	10
○ 生活系ごみ	.....	11
第4章 化学物質の管理		
○ 実験系廃棄物	.....	12

## トップメッセージ

---

伊都地区センター・ゾーンは、学園通り線を挟み、椎木講堂、中央図書館、全学教育施設等が立地する大学の中心的なエリアであり、また、学生・教職員が集うキャンパスのメイン・エントランスとしても機能しています。カーボンニュートラル・エネルギー国際研究所、次世代燃料電池産学連携研究センター、共進化社会システムイノベーション施設は、最先端研究をけん引し、産学連携、地域連携を通じて社会に開かれた大学としての役割を果たしています。また、給水センターや環境安全センターといった大学の環境を保全するための施設も併設されています。

コロナ禍からの復興にむけて、国際的に「グリーン・リカバリー」が広がりを見せる中で、日本政府は昨年、「2050年までに温室効果ガスの排出を全体としてゼロにする、脱炭素社会の実現を目指す」ことを宣言しました。1997年京都議定書に端を発する低炭素社会への取り組みが世界的に活発化し、「カーボンニュートラリティー」という言葉が一般的となりました。社会は今、エネルギーと環境をめぐる大きな変革の時期を迎えています。

今後10年は、新たな原理や技術が提案され、試され、カーボンニュートラリティーの実現を見通していく重要な時期となります。一方、従来技術の社会実装とその性能向上の試みは既に始まっており、太陽電池の普及拡大、家庭用燃料電池の導入が始まって10年余が経過しました。燃料電池自動車と水素ステーションの拡大、水素発電の実証試験が始まっています。様々な科学技術レベルの研究を通じて脱炭素社会の実現とイノベーションの創出に貢献するとともに、その進展にあわせた教育、人材育成を行っていくことが、本学の責務であると考えられます。

本学は平成30年9月に「伊都キャンパス宣言」の中で、「1. 世界をリードする人材と新しい科学を生み出すキャンパス、2. 未来社会を切り拓く研究成果の実証実験の場としてのキャンパス、3. 歴史や自然など豊かな環境と共生するキャンパス」を提唱しています。世界最先端の教育研究を展開しながら歴史や自然と共生するキャンパスを誇りに思い、環境の保全を大切にしつつ後進に引き継いでいく努力をすることが重要であると思います。



2021（令和3）年5月10日  
カーボンニュートラル・エネルギー国際研究所長  
Petros Sofronis

# 第1章 環境配慮活動に向けて

## 概 要

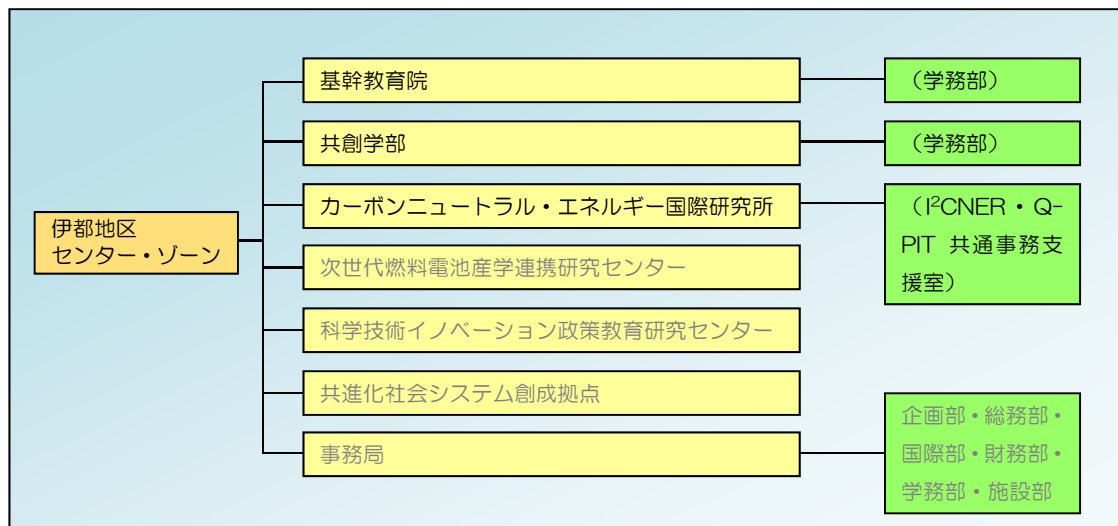
部局名 基幹教育院、共創学部、カーボンニュートラル・エネルギー国際研究所

所在地 〒819-0395 福岡市西区元岡744  
TEL 092-802-2421  
URL <http://www.kyushu-u.ac.jp>

### 沿革（概略）

- 平成23年10月 基幹教育院設置
- 平成24年12月 カーボンニュートラル・エネルギー国際研究所設置
- 平成31年 4月 共創学部設置（比文言文教育研究棟をセンター5号館に名称変更）

### 伊都地区センター・ゾーンの組織



### 対象建物

- センター1～3、5号館
- カーボンニュートラル・エネルギー国際研究所第1研究棟、第2研究棟

### 報告期間

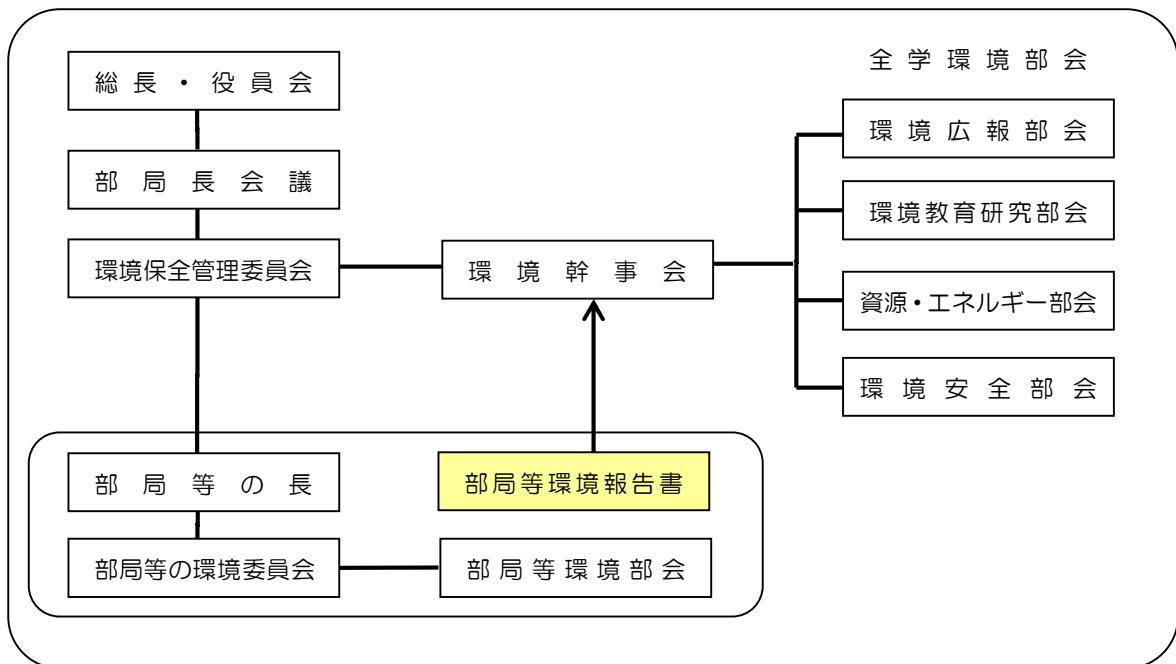
「環境報告書2021」の記載内容は、2020年度(令和2年4月1日～令和3年3月31日)の取組、実績値を中心にまとめ、一部、令和2年4月1日以前及び令和3年3月31日以降の取組や活動データが含まれています。

## 環境マネジメント体制

平成17年4月1日施行の「環境情報の提供の促進等による特定事業者等の環境に配慮した事業活動の促進に関する法律」（環境配慮促進法）を受け、本学では「環境保全管理委員会」の下に、環境広報部会、環境教育部会、資源エネルギー部会及び環境安全部会の4つの部会が設置され、環境マネジメント体制が整備されました。

このことに伴い、環境配慮の取り組み体制を構築しています。

環境マネジメント体制



## 環境活動計画と目標

令和2年度の環境目標に対する評価及び令和3年度の目標を以下に示します。

事 項	令和2年度目標	令和2年度の評価	令和3年度目標
組織・体制	事務再編に伴い、センターゾーンから基幹教育院、共創学部に見直し、報告書を作成する。	基幹教育院、共創学部に特化した報告書を作成した。	カーボンニュートラル・エネルギー国際研究所とも連携のうえ、報告書を作成する。
温暖化対策	引き続き、エネルギー使用量の削減に努める。	照明については、修繕並びに小規模改修の際、LEDへの転換をすすめた。	引き続き、エネルギー使用量の削減に努める。
資源・循環	引き続き、リサイクルシステムの利用拡大を推進する。	通知等を積極的に行い、リサイクルシステムの利用拡大を推進した。	引き続き、リサイクルシステムの利用拡大を推進する。
	古紙類の再利用を推進し、さらなる古紙類再生の徹底を図る。	古紙用の保管容器の活用等により、再生用古紙の分別、裏紙の利用を推進した。	古紙類の再利用を推進し、さらなる古紙類再生の徹底を図る。
グリーン購入	引き続き、九州大学グリーン調達方針に基づき、調達を行う。	九州大学グリーン調達方針に基づき、調達を行った。	引き続き、九州大学グリーン調達方針に基づき、調達を行う。
化学物質管理	引き続き、薬品管理システムへの登録漏れがないよう、努める。	関係者に利用状況調査及び利用促進の通知をして登録漏れがないよう、努めた。	引き続き、薬品管理システムへの登録漏れがないよう、努める。
	昨年同様、全学で実施している薬品処分で処理する。	廃薬品については、全学の薬品処分で処理した。	引き続き、全学で実施している薬品処分で処理する。

## 第2章 環境教育・研究と環境保全

### 新入生に対する環境・保全教育

入学時に全新入生に、身近に発生するトラブルや事故を未然に防ぐための普段からの心がけや初歩的な対応をまとめた冊子「学生生活ハンドブック」を配布しています。

#### 私達の手できれいな環境を

①未成年者の喫煙は禁止されています。

また、令和元年9月1日から敷地内は全面禁煙となっています。

②ゴミの分別収集に協力しましょう。（ゴミは指定したくずかごへ）

③公共の施設・備品を大切にしましょう。

九州大学の学生としての自覚を期待します。



### 環境にやさしい学園祭

平成19年度(第60回)の九大祭から、九州大学環境サークル・Ecoaが中心となって、環境に配慮したバイオマスカップ、リサイクル食器「ホッかる」、そして使用後は竹炭となる竹割ばしを使用し、環境意識向上やごみの減量に取り組み、成果を上げてきました。平成21年度(第62回)からは、その取組を発展させ、リサイクル食器に代わり、リユース食器の導入により、ごみの排出量をさらに削減し、資源の循環型システムの構築と環境負荷の軽減を図っています。



リユース食器「平皿」



バイオマスカップ

リユース食器は、プラスチック等の素材で作成されており、使用後は回収・洗浄した後に再び食器として使用しました。バイオマスカップは、トウモロコシから作られており、ケミカルリサイクルという手法で、リサイクルが可能です。カップの側面には、環境省認定のバイオマスマークがプリントされています。



バイオマスマーク

また、ごみの減量のため、「リサイクルステーション」という回収ブースを会場内に設け、ごみの15品目分別回収を実施しました。また、生ゴミ処理機を設置して、生ゴミの堆肥化にも取り組んでいます。



## 環境関連の授業科目

---

環境に関連した内容を含む授業科目は、以下の基幹教育科目です。

文系ディシプリン科目	地理学入門 The Law and Politics of International Society
理系ディシプリン科目	身の回りの化学 生命の科学A 生命の科学B 基礎生物学概要 集団生物学 生態系の科学 地球科学 最先端地球科学 地球と宇宙の科学
高年次基幹教育科目	環境問題と自然科学 環境調和型社会の構築 グリーンケミストリー 地球の進化と環境 生物多様性と人間文化A 生物多様性と人間文化B 遺伝子組換え生物の利用と制御
総合科目	水の科学 身近な地球環境の科学A 身近な地球環境の科学B 伊都キャンパスを科学するⅠ 伊都キャンパスを科学するⅡ 伊都キャンパスを科学するⅢ 糸島の水と土と緑Ⅰ 糸島の水と土と緑Ⅱ 体験的農業生産学入門 放射線とは何だろうか？ 教養の放射線学と原子力Ⅰ 教養の放射線学と原子力Ⅱ 大気と海洋の環境学入門A 大気と海洋の環境学入門B 森林科学入門 水圏生態環境学入門 環境と安全 決断科学への招待Ⅰ 決断科学への招待Ⅱ 「自炊塾」～基礎編～ 「自炊塾」～応用編～ 農のための最適環境制御 未来社会と新エネルギー 水から学ぶSDGsⅠ 水から学ぶSDGsⅡ

## 安全管理

---

### ○ 安全管理体制

安全管理体制については、労働安全衛生法及び九州大学職員安全衛生管理規程等に基づき、「伊都地区センター・イースト安全・衛生委員会」を設置し、総括安全衛生管理者、衛生管理者、産業医、作業主任者等を配置し、事業場の安全衛生管理の徹底に努めています。

また、衛生管理者による職場巡視では、環境保全に配慮した観点から改善指導等に取り組んでいます。

### ○ 毒物及び劇物の安全管理

毒物及び劇物による事故や環境汚染の防止に備え、「九州大学化学物質管理規程」の定めるところにより、対象薬品等を厳重に管理しています。

また、毒物や劇物を取り扱う研究室においては、施錠可能な金属製保管庫を設置し、化学物質管理支援システムにより、常に在庫量及び使用量を把握しています。

### 第3章 エネルギー・廃棄物の削減

#### 資源、エネルギー、廃棄物

---

##### ○ エネルギー使用量

電気	4,001,752 [kwh]
ガス	122,187 [ m <sup>3</sup> ]

##### ○ 水道使用量

市水	2,189 [ m <sup>3</sup> ]
トイレ用水	4,448 [ m <sup>3</sup> ]
実験用水	2,189 [ m <sup>3</sup> ]

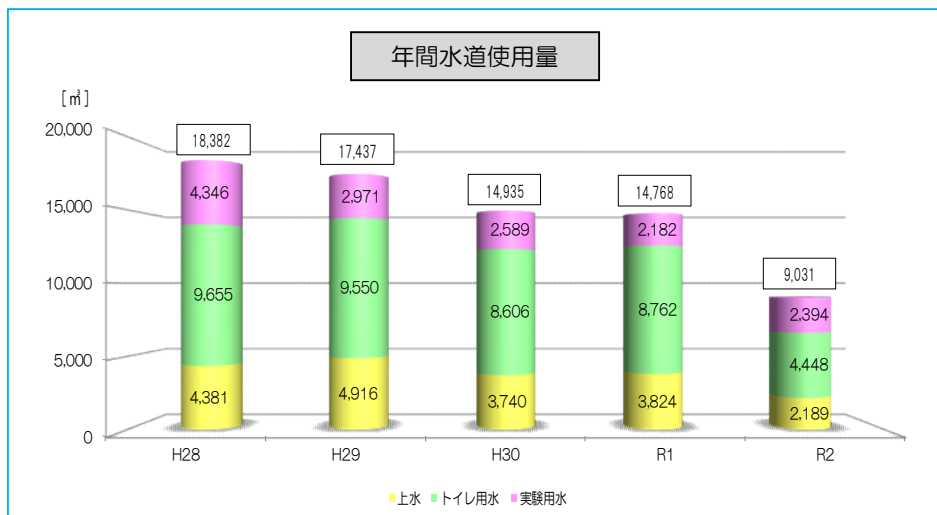
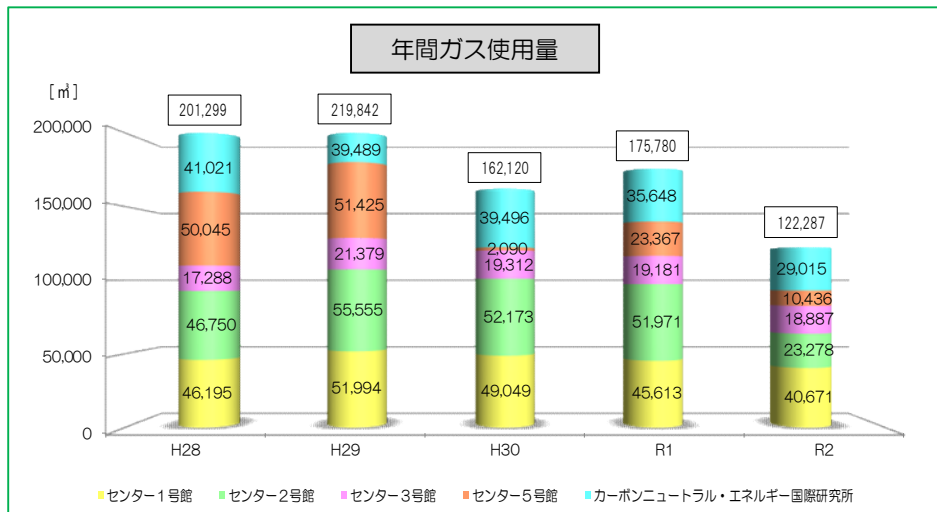
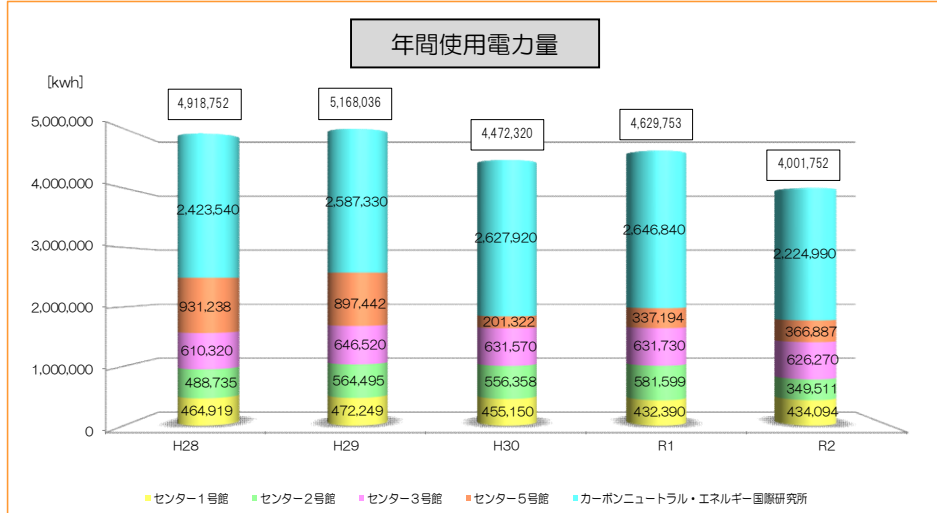
##### ○ 分別ゴミ

種別	数量	処理法
可燃ごみ	241 [m <sup>3</sup> ]	焼却
金属くず	2,671 [kg]	再生
瓶	1,073 [kg]	再生
発砲スチロール	35 [kg]	再生
蛍光管	60 [kg]	再生
乾電池	90 [kg]	再生
不燃ごみ	464 [kg]	埋立
有害付着物	160 [kg]	焼却

##### ○ 実験系廃棄物

種別	数量	処理法
無機系廃液	900 [ℓ]	再生
有機系廃液	4,250 [ℓ]	焼却
廃薬品	57 [本]	埋立
実験系可燃物	1,883 [kg]	焼却

## エネルギー関係のデータ



## 用紙類の使用量削減、グリーン購入

### ○ 用紙類の使用量削減

両面コピー、裏紙の利用等に努め、限られた資源に配慮し、用紙類の使用量削減に取り組んでいます。

### ○ グリーン購入

処理紙片の再資源化が可能であり、環境に優しい廃棄処理を実現するシュレッダーの購入など、九州大学グリーン調達方針に基づく調達を行っています。

#### グリーン購入基準適合製品

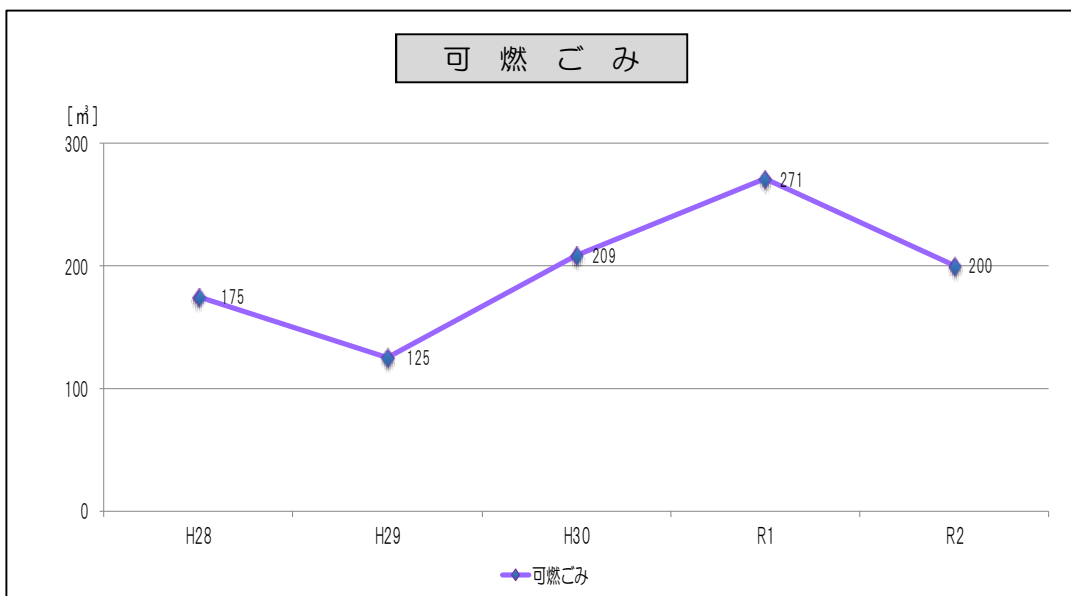
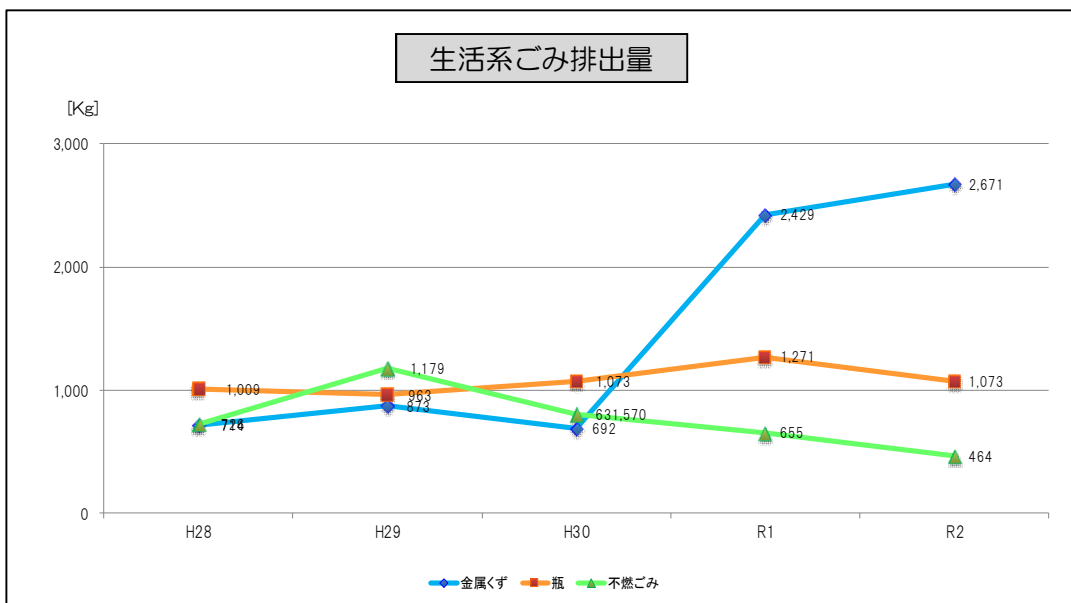
分野	摘要
紙類、文具類	コピー用紙等、文具
機器類	事務機器等
OA機器	電子計算機等
家電製品	電気冷蔵庫等
エアコンディショナー等	エアコンディショナー等
温水器等	電気給湯器等
照明	蛍光管等
自動車等	自動車
消火器	消火器
制服・作業服	作業服等
作業手袋	作業手袋
その他の繊維製品	ブルーシート等
役務	印刷等

### ○ リサイクルシステムの利用

不用品の譲渡照会を行い、リサイクルシステムの利用拡大を推進しています。

## 生活系ごみ

本学では、平成8年からごみの分別の取り組みを始めました。  
基幹教育院・共創学部においても、廃棄物の再資源化を目指し、分別に取り組みました。  
再資源化できるものは、全学的な取組により回収業者に依頼しています。また、飲料缶、ペットボトルは、エコセンターにて回収し、再資源化処理を行っています。  
今後も教職員の意識を啓発し、ごみの分別のさらなる徹底（紙くずの可燃ごみの分別）により、減量化・再資源化の推進を図ります。



## 第4章 化学物質の管理

### 実験系廃棄物

教育・研究から発生する廃棄物は、産業廃棄物（特別管理産業廃棄物）として、市及び県からの運搬・処分許可をもつ業者により適正に処分しています。

有機系廃液、無機系廃液は月1回、廃薬品は年1回、環境安全センターを通して、処分しています。薬品瓶は汚染度によって、「資源化瓶」、「不燃ごみ」、「有害付着物」として処理します。「有害付着物」は重金属を回収し、残った瓶はセメント原料として、再利用しています。

